

芭蕉翁畧傳

全



仙臺市北一番丁九十五
居藏主大沼和樂

恩をいり思ひ致すのみといふもかた
しなれど、仰山、仰山乃修滿淨土のうへに
批評せられしをもおもひて

ちのころ一巻お十月十二日の芭蕉翁る卒
年と云ふにあつたは、はなとみえられしを
わのしゝうをいふも、或いはあやま
建ある冊よすおあつたりたる今式
をいふも、はなとみえられしを

かのうきなり　たしな　おもしろいことなり
 なるなり　いふことなり　いふことなり
 又いふことなり　いふことなり　いふことなり
 かのうきなり　おもしろいことなり　いふことなり
 かのうきなり　おもしろいことなり　いふことなり
 かのうきなり　おもしろいことなり　いふことなり

芭蕉翁肖像(墨)

生為摸會



友朋

同好方々家い冒にい
みらわん地がうのこ
やのこえいのこ
は
あわがもたみあ
い

みく
は

あ
あ
うのあ

あ
あ

芭蕉翁畧傳

常陽

常陽

幻窓湖中 編輯
西荅野巢 校合

芭蕉菴桃青翁を伊賀國阿拜郡松植村の人也平士彌平長清室清の

苗裔

其叔父郷と姓とを所松植氏松尾氏福地氏也
宗族の松尾氏と存す所ある所あり

松尾儀左と云ふ人の子有長

次與左

儀左は人なり可なりと云ふ伊賀守也
此の芭蕉翁の伝は依りて多に可也

と云同國上野赤坂町に手蹟所

範と云家業と云次と云左衛門命清と云為堂と云殿

一説
九條

長基の長也六

則芭蕉翁也

正保元 甲

申歳生を修ひて幼名を松尾守七

一説甚七郎
又稱金也

後改めて忠左衛門

芭蕉花鏡洞云云清必不亦
是六伊賀國阿蘇郡柘植氏之思

恒也其子士師之部室隔よりて五代を歴る清き人今子孫多ありて家とてこの山川橘崎西川
杉尾此河と名乗なり板橋庄に恒と其弟は杉尾と名乗とせし人初て國の府あり上野は赤坂は恒
是芭蕉翁の父也母ハ伊豫の國人也姓氏ハと云くハ其子二男四女あり嫡子依久其弟依光也
と云次男也士師宗房も名今恒是也後ハ名と更く忠成と云

同馬集卷八全傳云、其兄の假名爲七郎と云ふ、故書家云、六七郎と云ふとそ兄と有在集と云ふ、
は、八郎華は、也、仍ち、形、被、達、一、研、云、甚、質、と、云、り、系、族、の、政、林、と、云、考、う、達、一、研、亦、有、地、書、と、云、
一、八、松、尾、氏、の、先、祖、と、言、句、と、云、い、一、別、姓、あ、り、其、源、里、と、云、い、伊、賀、の、國、人、傳、ふ、
又、曰、柏、原、の、清、門、の、所、あ、り、者、陸、介、事、に、盛、と、云、い、人、は、考、古、兵、衛、尉、
平、季、宗、其、子、孫、亦、兵、衛、尉、宗、清、

東鑑、孫承左尉大系圖、右岳尉李宗子字清武家系圖、左岳尉李清江字在忠家譜
來考德元年治物語、孫承岳藩中清平季宗の子

凡吾東國之樹、其外の玄室清の終りし、うやうやしく六伊勢に在る。今傳或ハ伊賀の國人の説は、少くとも大系國室清の母の系儀、松植と号したるありんか、その因縁、同本國郡版図には全振らず内庭事の尉宗志有記せよ云々、伊賀系内庭事の尉也、今も松植といふ松尾と云ふ家あり。

寛文二壬寅年宗房十九歳よりて初て役者新士即良精成なるまふ
嫡子より良忠より良忠ある時宗房を呼く月花をよめて阿そはせ

也
良忠侂者
蟬吟

北人北村唐吟

再昌院法印

の門はして常房と雨吟の巻

何れ其外反故とも数多あり一とせ大坂の役と戦死せられし西軍新士郎

良朋

良精の父にして
良忠の祖父あり

遠忌法道

大坂也。是如世能夢乃五十年。

懷吟

寬文六 丙午

宗廟
之歲

の夏四月良忠不幸して吾く世と辭せらるる家房御

く傷悼して同六月に遠髪の依りて高野山報恩院に収む

報恩院の過去帳より松島忠雄

殷記

同月来下山して此を不道此志ありて頻に手紙乞ふと云ふ

一、其年秋七月遂、私に王家を遊遊して、同僚孫某と、其者
 の宅門に一封を残す

雲々厚く川なる厚の生別世

宗房

と書し経冊也宗房宅地を屋敷新と所中屋敷城東より良精社
后兄すたき安房殿也 すたき安房は其基の所と有
後良精は其の親と有 孫太史八隣家あり今河合何基

る宗房は旧宅なり

芭蕉翁の墓 曰はば良精子息良長事とありしと宗房二好く思ふ者一宗と佳むと云
續林桑隱志傳云芭蕉翁は佐府より表而有忠勤宗房は佐一家の節の古基町と云ふなり
又云と云ふと在宗七年拾穂軒季吟小遊學也

元禄二年加茂村の消息は芭蕉翁の御ありしと有基町云々云と云ふは
季吟の遊學中はありしと云ふは其の事也

以頃東山の麓に作泊船を桃青と号す 宗院法師又約月軒
宗院と云ふと云

寛文十二壬子 行年 廿九 九月始て東武に下り石川水植功と號す

風俗文選云翁嘗て遠近切修武石川水植四年賦述控功而入河川芭蕉居士家三十七歳
要東山石川水植功と號すといふことありし一説は村中昔時と稱して春角の夢を
司りしといふことあり其家要東山といふ所なり佐府に隣りてありと云ふ事あり
松尾を多く村と稱しといふ事又村家よりありて其家よりいふ事ありの事なり

明て水植の功と号したるものありしと云ふは佐府に隣りてありしと云ふ一説は
大は九才と云ふ事あり二十一年より佐府に隣りてありしと云ふ事あり

延宝元癸丑 行年 三十 同二甲寅 行年 三十一 の年難髪一結び風流坊又 是れ松尾
と云

松尾 佐府解屋敷中
持家名松尾の時也 志厚して河川と号して金わし人草芭蕉一様と裁

そは松尾と先ゆくむ秋の二葉なり

繁茂するも人嘆く芭蕉居士と云

同乙卯 行年 廿二 同四丙辰 行年 廿三 同五丁巳 行年 廿四 の春二る顔あり同乙吟をうると云

の春までにあるに戸を吟と云

あゝ何と云ふやなふと追う飯と汁

六月廿日以初めて伊賀より数人同林又東武に下り

同六戌年 行年 廿五 同七己未 行年 廿六

秋八月古郷赴る千里 俗名油屋 同傳する
は時のそと記に甲子紀行の事とし
紀行或は筆枕と云

野々々々心ふ風の志む月うれ

秋十と世却て江戸を去る古郷

東海道をゆく粒根を越く

霧時雨ふくをふりておのゝろき

富士川 古名と藤原のの邊ふれ子と憐れあひて

猿と行く人推子に秋風いなり

る上の風冷

道行くの木槿をるう衣をる

小夜の中山を

馬ゝあて残夢月遠く葎の煙り

伊勢よりて松葉屋風瀑 実ハ伊賀の人
はるあま越えて十日もくわえと

梵のいお宮に信

みそり月あ——あまの秋を抱あじ

西行名の麓を過

茅渟より女西川あふ歌よりみ

まうと山田の雷枝を訪る早くも数句をうけく

宿するわ——せん西行あふ秋に書 雷枝

まを枝と春ふ風の破を 笠

といふ挨拶あり甚夜に決られく又の月峯山を訪り

師の標むし拾ん来り集る

塔山

まゝ記し霜は幾四十一

といふ様振あり武蔵店屋体一あひけるふ家女料紙紙持せり
りうりく彩ひはり——と付終り

葉は香や蝶乃ツバ翔たよものす

閑人庵牧を訪く

葛植く竹田又本はありしり

長月の始古く海ありはる伊勢と名店をいふ
後鳥羽殿より人をかり亡母の白髪をぬいて

まよふ人消人涙そりつき秋乃霜

又旧里をゆく大和に赴き葛中郡竹の内といふ里に古くをまね

日頃より里旅を著ひぬ

綿弓や琵琶よりくまむ竹のおく

二上山南麻寺又祥林寺と云用明帝第四
皇子麻呂古歌に建よりは信て庵一の松を見たりたに

大さ生枝のくすまひくられとあひて

僧あそかひく花よりる法のま川

芳野より坊在法院南陽院より
いふ素常よりあるに舎りたむ

礎打く我り一円せよ坊々あ

西行の旧記よりくは清水を尋く

霞よりく一試し浮世をくかきや

奥は院より今後醍醐帝の陵をぬ

津原を經く志のふれと名のふれ

大和より山城を經く近江路ふる處に今頃山中試過く

義經のちうふふ似たり河きうん

不破をちうく

秋風や敷も細も不破あり関

林瀬川の本國 きし瀬川の 家とさうく武蔵野の旅を歌ふ

死もせぬ旅のそとふれのそ

は時大垣のぬれ新に 大垣の古家武蔵野旅を歌ふ 入山は時ぬれ新を招き

霜きき旅のぬれ新を着せり ぬれ

古人のやうにぬれの新

とくし旅あり尾州にぬれ新 ぬれ 家とさうく武蔵野旅を歌ふ

は海より草鞋もぬれ新 ぬれ

師老の海より人といふふれの新

海より鴨のそとふれの新

熱田の海よりふれ新 ぬれ

あふふれ新 ぬれ

名護屋入る長途の雪海よりぬれ新 ぬれ

あふふれの新 ぬれ

は時旅のぬれ新 ぬれ 左山の抱月亭をぬれ新

市人といふふれ新 ぬれ

十二月八日升亭能譜有

旅病うーおと師乞乃夕月秋

又勢州の杖と曳く葉名の奉院寺古益亭の庭ひて

冬牡丹子なるよ堂はかしく花を

州の杖とお供く深の方より出く

あけそのやふ魚を飾きあとい寸

室ふり鞋をとりけりこ杖と並くと詞書ありて

と年々ぬ笠着てふ鞋をたあつ

貞享二乙丑折年
甲子山家三年秋越るひく

誰う堪そ露染る緑あふりしの年

或人の許うて

旅うくは古葉を梅にありうけり

又菊都るあふり

春の色や名もあき山の鈴のひみ

たふら七重七重伽藍ハ重梅

二月堂ふ院と羅索院と号
本号親明寺

名取や氷の僧は皆乃おと

在原寺石上村在原山寺名を依る在原寺と云
堂年親明の回堂の地と

うくむき浅魂と眠るを梅柳

まう里深うと里と升秋風う鳴院の山家を侍

梅多し一花のつや新をぬきし

伏見西岸寺

浄土宗三世堂
上人能名住

任に人々をえり

我家の伏見に 菫は志のこぞ

大津の山と山路を越

山路をく何やらゆりし 萱刈

は時國の僧手那

本橋寺号
蒲葡萄坊

大津の白青門人

青無ハ
年輩

近江に於て

大日枝や一とけし一かきみ

かきみの松たむよりおろし

水とて流るゝ田友をきく存命を悦む

いけちふりの中は流るるさうさ

二月盡又尾州に蓬島にお相葉の家をさう

蓬島有
草の島田三
秋仙と云

寺に詣たまひ

笠さやめいゝぬいとやもまけぬ

笠さやめいゝぬいとやもまけぬ
笠さやめいゝぬいとやもまけぬ
笠さやめいゝぬいとやもまけぬ

四月のはじめ豆州の葉にあらひて

いさゝか小枕さうさう草枕

こゝに相葉の許る東に赴く日を告ぐ

牡丹葉のく分ける時名残を

まより甲州をへ

新駒はまよりへさむやうか那

同月北来深川松風別墅に泊りたまふ

夏衣いさく風流可流くさん

伊勢に風瀑を送るひ

こもれけに佐敷の中山よりきこえ

冬草庵に偶居一閑居の歳を作らひて

酒の免といふおれね衣の雪

乞く喰ふひ喰ふく喰ひすなは年終るれと詞をよて

めくく人の数も入らん老乃著

貞享三丙寅行年 四十 深川に在

伊勢うき家よりめくく子代のを

東風の雪も雪の乾くふ雪かやたる草庵の閑ある折より始る
ふりて

古池や蛙飛ちむおれおと

疎庵の僧宗波旅うきをける哉

古果たけりもれあきとけりふ

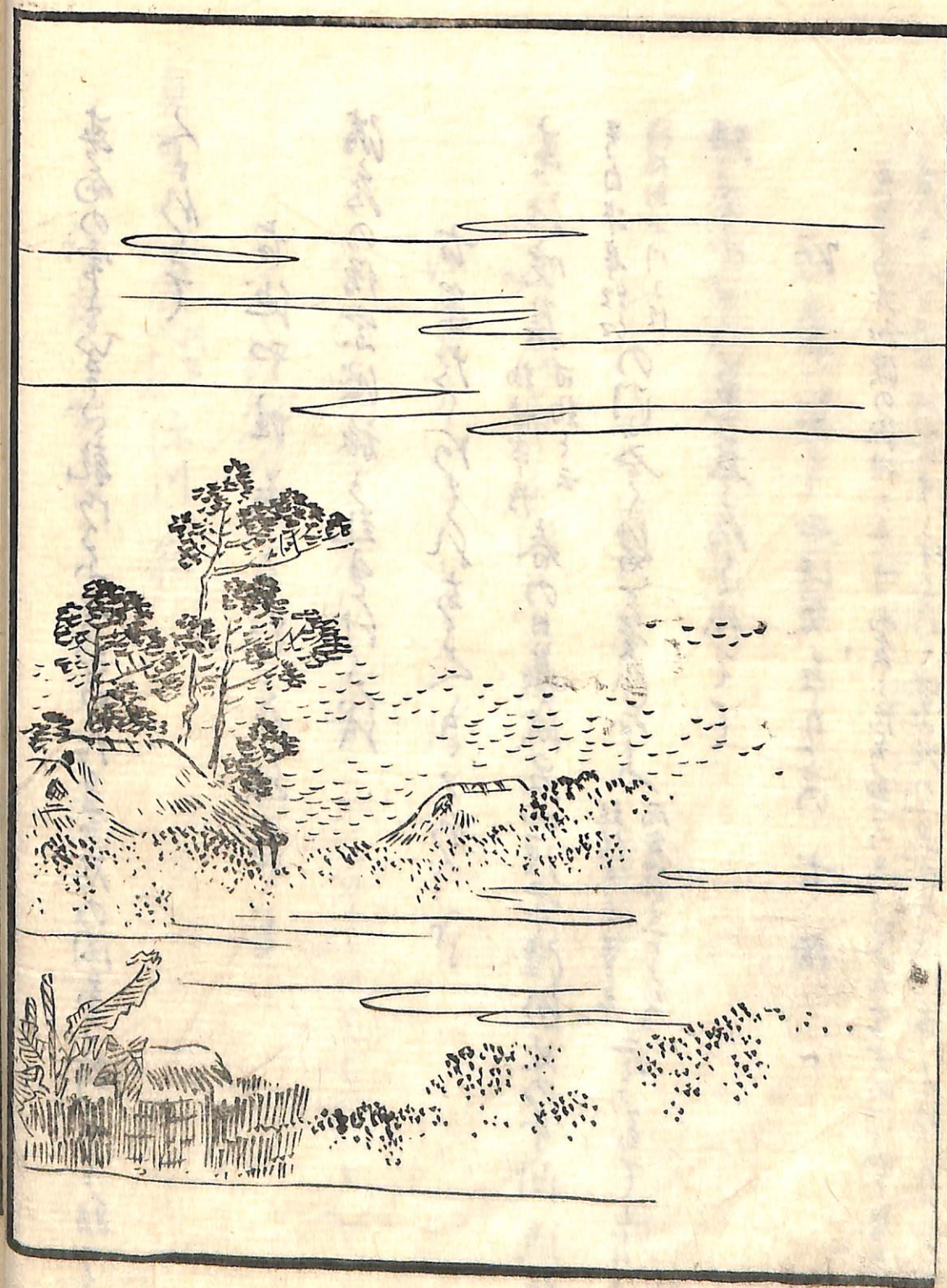
春の日集成友四月常陸御所の本間道悦

号自筆亭記の 初懐寧翁 百病と云 春の日集成友四月常陸御所の本間道悦
後因お小川に候 の門は今も雪をまひひり 起信文貞享三年 丙寅四月十一日あり 冬まで深川に

帰るふりて芭蕉庵を化して

何とせむとやけりふりての古柏

素雪高吟和漢の詠情を貞享丙寅と後とを成りたるふりて氏の門に今も雪をまひひり 起信文貞享三年 丙寅四月十一日あり 冬まで深川に
まひひりたる年終るなりとすあれは素雪高吟と成りたるふりて氏の門に今も雪をまひひり 起信文貞享三年 丙寅四月十一日あり 冬まで深川に



五月の以醫業を多しひひ六月地涼の故を未だ未だ和漢の能書ありて又然といふ
潮息市られけりや評事久又云未だの号あり表海東堂信若山に松長備一統を以て
惜哉の人又詩能く是す徳州舊跡を極す南吟の三句を
曉風白より朝やより夕よりみ 三

貞享四丁卯

深川亭廣嵐雪

うし袖をぬぎし

成を以て美なり

誰やか案上けりし物乃春

病と何て病と籠りあひ

花の雲鐘をうねう浅草

四月の初め其南の海に追善あり

卯の毫もゆるぎを容れずには

臥水亭之遊記下

西よりくねりて入るべき早苗うね

初秋納涼の夕嵐を望み盡賛哉理まれのひそ

河さうが中手能く走るあそびあり

八月唐島よりあり

唐高
紀行

曾良

徐名河合
題

宗波と傳ひぬて

舟より舟に徳をわくるは舟成ありと入けるを經くかきとるは底迄利根

川の邊に布衣と云ふ者のひ漁家と云ふと秋舟を下して廣崎山の麓

根奉る佛頂和尚の許さるる人をして深省を教へむと云杜少陵

のうとゆうて

青の菰くまに新嘉月尽の所

月をや一梢をぬれ持て

神前へ詣りて

北松の葉をえり世や神の秋

田家を道違へ

新うけ一田面の鶴や里の阿き

秋のや鶴をうけし月夜に

潮来は自準亭に又都原をぬりて

萩原や一萩をうけし山にいぬ

八月下旬江戸より又十月古郷へ赴く

行旅記の又
芳野のり云

旅人と我名をよめき萩初時雨

露沾公 号遊園亭公城
内居居あり

又其蘭亭にて秋別舎の里をぬりて

一尾松をぬりて雪うた一方雪

鳴海より

星崎は雪をうたふや鳴海より

本陣寺島氏業言亭遊ひぬる井雅章つのはれ和へ

京よりわきへ雪や雪は雪

報名出雲守氏雲亭より

おもしろし雪やわき人の雪

実思亭知是亭

酒造家作
分代金と云

は能譜阿より之河國保美村小杜國の

左ける旅人鳴海より廿五里斗りて地は下れ茶店に休らひて

越人 越智成茂 之 信之 卷四 附 書 之 後

卷之五

陳其美

此後之世

又屬洲社一社國同傳一 柳良友識

蘇子瞻詩集卷之六

建國以來皇權の威光たるを披し

廣樹堂藏書

東渡の機微を説く

謝子誠

名護屋の一人として名を馳せし休庵宗水

John A. Brown & Co.

張江村

馬定祥之梅之北乃軒瑞之

又社國傳家於此其間其心已死矣

一、今當師克此其月也

此乃流州岐阜大垣の人來り俳諧あはれしに有所志十日の夢を
全とてく旧里に赴きぬ

旅病してらんや浮世乃煤も心

兼名越過り永里ふるとかた枝実坂むきけを以てに鞍打之りて
るるるるる

からねく八枝実坂を落馬う那

古郷に帰る

古はくや福の緒に泣く——の巻

古の俳諧は五五と稱するも其を所謂再形房初名を名爲藁屋
龍竹房を藁屋西藁屋是なり

貞享五戊辰 行年 宵の年冬の若狭を——人と回友來りて酒を
早十五

元日病忘るるをけし去有て

二日あもぬりちや——ち花の春

風麦亭に遊

ちるるるるる九日は聖山うれ

山里に菊菜おそ——梅の花

卓袋亭は月待に招くをひ

月さちや梅うけけゆく小山伏

山家に遊ひて

多き白く石炭ほろふの梅はむ

門人猿雛 依名 一對にひて

もろくはる路折るまゝに

或人曰はるの自
宗七宗をてけい河波底篠峰山新大佛寺
後意と人用
基のさう
に信
信の懐旧の情を述ぐ

丈ふ陽炎を——石は

伊勢の山田に信く宗司梅を尋ねてい——うら子良館の内より信く
うら子良館の内より信く

伊子良館は一春う——梅の花

二月十日のう神路山とある福小西村の源を志し増賀は信を悲し
むとけ——書あつて

何れ木の花とある志し人自むう那

をたうむとある夜更着のりしん

十五日外宮の館といふ変うあつて

神垣やおもひいふけに涅槃像

菩提山神照寺

山寺は出——さつけし聖老に李

綱代氏新弘氏の男胡来
一本作
う許ふたで

梅は木と猶やういふ本やう免のもの

二葉軒紙訪りい

数枝門を扉のわいの葉う那

龍尚舎
神職と龍尚舎と号する
持掌の人を舎表はる
と達とく

物に名を先とし秋の暮茶の那

又伊賀の湯より上野薬師寺の初會

初梅おし——さきさきと紅いなり

藤堂探丸 新七郎良長と稱す
と針良忠の男

成長の後芭蕉翁の宗房なり——時お忠

首と雲の別楚の花を稱して招き初く對面ありし——只いむお忠

初めは互に落涙別れの泣

さあ——はるおのひをささくつかさ

春の日をやく——草うさぎゆく

探丸

さあ——梅をかくて
今春もささくつかさ
芭蕉の晩年まで
俳諧一生のめまろを
宗正亭の教日おひらむて

花散家より——お終りやせりと

はるは花をれい——その色う那

芳野は杖を曳同村杜國

自稱あり
草丸

乾坤夜國の二人堂は裏よりひ

芳野より——ゆきとんせうと 梅 笠

大和の國今井梅井おとさく丹波市より

草臥く家からさるや夏の花

草尾村

花のうけはふ似て旅おる

初瀬の歌音は靈場

春の夜や幾人ゆき——雪の隅

葛城の麓を過ぐ

花をあげゆく神の歌

三輪多武峰臍峰

雲霞うきうきと峰より

龍門の瀧

海飲ふやうらんう瀧の水

龍門の花やと居た古産せん

西河の瀧

ほろくと山吹ちる瀧乃ちと

結城の瀧布留の瀧一尺一尺の芳野の花と日蓮留りて以て

天下はありと憩息ある西人の旧位苔清水

甚るの本下ふはうと中う那

凍解くやう汲み人清なる

まう河ゆきとく紀伊富野とまう

父母の志きりに急ぐ那の

行喜と和歌の浦まで追付くる

紀伊丹寺よりと位と湯李

むと川流くしうとむね衣と

南都うきうきと

灌佛の日ふき色やと鹿子と

河石集の巻の就毎書は艦真々如為電武天皇の應寧帝
朝きて南都の車ある端西の欽也者曹不聖の葉師寺三の

戒櫃と云ふ人云く又一本は海と云ふ解度の
難風を凌目高きせむといふと云

此像をねしめ

著者一々題目を考へて賦する

旧友と別巻

鹿の角定一ぬゝのこつ続ゝ那

去方云一年太わの法渡り太子は罷張あり其時太子冠を又落し侍ると後の昇
帳より起りきしとありなりとの証あり侍るや

文と津は國と越と大坂と府とのひて

病つゝかゝるも旅の心なり

源磨の浦を一尺して

月夜あれば留守にやうな涼風の夜

をむかひたるやういふまゝのやうに書かひて

端牛角子已下須磨明石

河之北夜泊

靖 壺 やさし 夢 紙 友 の 月

鉄拐くわ拳こぶし之の志し

須戸の海士の志先う帰や郭公

得之渭中
方也

源平は其代を絶へしめありけり
今も其代を絶へしめありけり
又後醍醐天皇

玉崎の宗鑑

俗名支那陳
三郎範重

の旧記を傍

有るを安んずるに

大津より越く本曾路へ赴んとしぬ

はるる田あは月よくて魚人奔

祖翁の日記

白毫寺より

六月廿日大津と出ぬ川より七日赤坂より

八日岐阜より秋芳軒宣白とてとてとて稲葉山の松林下

小長途の旅愁を慰めぬ

山けやみ紙巻人ぬきけ

人にしきあはれは岐阜は鶴岡をかんぬ

おもひろくやとてとてとてとて

又たふひとてとて川の年魚能

岐阜山より

城あはる古井の清き先同ん

は折かゝる梧く少年はうしとてとてとて

とてとて人よりとて一人花も友那ふ

長等川に臨する賀路氏の水梯を記してとてとてとて

はあはる目よりとてとてとて

東門に百の軒ありぬとてとてとてとてとてとて

やとてとて人藤は杖よりとてとてとて

杉野外桑軒長垣を宿る

粟科よりとてとてとてとてとてとて

田中法花よりとてとてとて

前住や子孫かゝるの略乃考
大曾根成就院

何ぞは人立よも似き三日の月
晴海に往りて

初秋や海も青田の一みと
知是る才金湯つゝ新宅と誓

ふれ家やもく知ふるこゝへ脊戸の粟
はあゝ一日遊ひのひて課題喜瓢を得

夕顔や秋をいろくぬ瓢う那
名護屋ふ入那あゝ旅行を送る

見おくるあらしろやさひ秋の風

或曰は元古集
所見ありと云

八月史料の月入じと旅立ぬ人同行越人

史料
紀行

送られつおろり川をてへ本曾の秋

今廓おとさるゝ之をわたりて

秋かやち酒もささるゝぬうりうれ

菊号

号櫃
本堂

う僕を添へて行路を助く様もあひ

あけをよいのちをかむきさうりら

菊号や過客う場たち啼あゝ四十をうを越て娘捨山の月秋をぬし

侍や娘をとり泣月乃な

善光寺

月新や四門田宗も只むと川

吹飛も石る海苔の野をわ

越人を伴ひて江戸へ歸る越人とも客の能楽あり

箱の自書と白柳林の月々玉級の望遠鏡山よりあつたあかきで
格あつたの目よりあつたあかきで十三歳とあつた

本居の夜もやうとあつたねと后の月

素雪亭菊園の會もなれあひて

いさゝこのつとせうと都へはるる秋葉

源川の草庵に閑居して

枯枝の鳥のと海より秋乃雪

或人云は向山室中平し月より言ふ探春の記云は等しくあつたの月と後葉集の月と信濃
秋過るとさうとあつた

雪もつとや穂金のもうきは前の一

と云角とあつたの月然ととも聖平集の月とさうとあつたの秋江上の破屋と蜘蛛の古葉
秋もつとさうとあつたの月然ととも聖平集の月とさうとあつたの秋江上の破屋と蜘蛛の古葉
と云角とあつたの月然ととも聖平集の月とさうとあつたの秋江上の破屋と蜘蛛の古葉

元禄元戊辰九月 行年 改元 四十五 源川在店

冬就と又より源人ほさうと

都よりを誰ねとあつた片とさう

去年は健病を思ひ出さず越人消息に信ふ杜國次郎人時越人を伴せられ
たきとあつた

二人見し雪と年と降けさう

盗人よりつとねとあり年の雪

元禄二己巳行年 四十六 源川より春をむさうと

歳よりつとあつた人氏と庭雪

木啄も唐を破る人 夏木立

高久の宿青楓 佐名 南無 家より飯桶のひて

落来るや高久の宿はほろろ

殺生石

石は青や夏州 ありて露若し

芦那に里遊行柳

田一板うゑるまゝ新柳うゑる

白河の雲を越阿武隈川越ゆるやけ沼を渡る緑岩 漱郡須賀川

の舞等駒 号作早稲品 伊左衛門 う舞うまゝて

風流のけしきやあぐの田植うゑ

四五日止の葉門の仲う舞の雲は初とまぬひ

世の人には足付ぬもや 耕の粟

等駒う舞をきて櫓は宿をもちも安積山二本松馬場の岩屋

をいんて福島を金さるのふりきりけを尋

早苗とるもえやむう 志のふ摺

月の輪は泣きもえ瀬うろく飯場の里鎮野の佐夏座司う四

跡をる精舎 号王 寺 ようく義經のたふき慶う後とるふひ

高もた刀も年 月うろろれ紙 熾

甚秋飯場やうり葉折舞う伊達の大木戸を越し 籠摺

白石城を追葉輪並ふをきりひて

笠島をいつくみ月かぬりる

岩沼の泊武隈の松

櫻うらねお二木を三月哉

名取川をさるる仙臺へ入ぬ日道留——ぬふ重工加藤の地
こころに國の草鞋を綴る

阿やめ叶はぬむきもせん草鞋の緒

玉田横野つしう岡業師堂天神の神社をぬ——おくは細道乃
山際をたると十府の蒼やふひく市川村の多賀城を盡の解とふし
聖田の玉川沖の石まね松山を過く塩竈へ金沢城を社以の社親よ
目を驚——泉三郎 名忠衛 秀衛三男 忠勇を感へ松島へ渡りぬ月十日瑞岩寺小

訪く十二日平泉とあらばし河ねは松林あるの橋をさるるたふく

石れきる出金嶽山と海中に泳めやとて袖の浪尾あはれ牧まのく堂

原がと金ふきんはしきるる舎り平泉 秀衛 康衛 義隆の旧記 新なる高館 旧記

夏州やつとめのももこの夢の松

二重城ね

又月面の降降——やまの堂

南部街道と遠る人やま岩まは里は泊中忠時と川のふ島と
道ふ——これ湯より原前の家よりきて舎りのひ

帯さるる馬は尿きるさるる元

出羽國の戦ふは海とふ人死なれ——て嶺峯の地あり家とふ

底より尾を海の流れ 録本 家とさうしめい

源一と成系あやしてあまうあま

眉掃を付しとく紅のさくら

山歌飲の立石寺 号宝珠山在室土中所有する
筆所意見大所 家基 浅ねんと七里半を飲酒して

かの精舎うま

志川とさや岩ふさぎ入輝のさき

新庄の山歌所風流亭 俗語
あり 最上川をけらんと大石田の二葉 俗名ふたば
平なき

宅の日和を待つ 俗語
あり

さきんをけらめさや最上川

此度の風流はあま
ひさしと云ふなり こてんさやきねあふさの院仙々あまの難を

道く六月初羽黒山とさきと南谷の別院と舎別當舎元念はあじせらる

有かや雪をかきりけ 南 谷

源一とやけはに日月の羽黒山

八日月山を待つ

雲の岸いく川端まで月乃山

湯殿山を待つ

語りきね湯殿うねい秋うね

遠く山を越て鶴うまの城下重行 俗名
あり 家と舎りたむむと

臨りや山を歩羽はさ川 菰子

又もみ川をのり酒田より合道 俗名
あり 許さふの六月十五日也

暑き日哉海へ入るるを云ふ川

不至

号岡房儀
伊豆元明

う亭に倉袖の浦の眺望

河つゝ山や水浦うけく夕暮るみ

山をみし磯を信ひ家傍に舟泊るゝ

家傍や雨の西施う移るるを

夕暮るやさくくは源む浪のむ

又う北陸道に杖を曳加賀の府まで百千里風の雲を越え

越後の地より越中へ境ひ市振はるる

はるれり路長きと云ふ
みくまはれと云ふ

出雲崎へ

あゝ海や佐渡に横たふ銀河

直江津は河を寺に舍りぬ

文月や六日も常は水に似たり

高田より醫師細川青房う亭に遊ひたまひ

茶楼より雪のそ那をも草枕

新譜

海に降る雨や雪にき涼なり

或人云は内山
不知と云ふ

親志し人子しらん大坂の駒うへを北國一

の難を浅瀬く金りを求めぬ

北の川家より遊女もあつる萩と月

又早八瀬よりおやぐの川を渡り那古は浦より櫓籠のる浪

と余はるるく加賀に國へ入

早稲の多やとけ入右なる磯海

卯の花山徑利仙舞う岩

くうかゝやとひ起しと落しと

或人云は句
金澤より先一矢 お松氏稱
う墓う信

塚よりかけ我泣きと秋の風

小春亭に遊ひのゝ其餐息山海の味とほりぬ善哉とおゝた後也
其次の和は合わ海野川下りゝ一層店ゝあゝゝ容態をたいりゝ先
のひて只あまのゝたりと

あゝ落のさひゝ此味をさすたゝ

一布より左のめり亭
とまゝい語あり
卯辰山の柳渡軒白雲亭の遊む

散柳河ゝゝゝ我も鐘をたゝ

少幻庵の遊仙借あり

其竹の句 妙若きゝ
ゝ毎ゝ新しゝゝゝ

秋もゝゝゝあゝむけや水茄子

小松より

あゝらゝゝ此名や小松吹ゝ秋もゝ

観音亭に

ぬゝそやゝ人ゝをかゝや雨の秋

太田の神社ゝ詣ゝ富後別當実盛ゝ甲冑と刀をゝ

あゝむさんやあ冑は下のきりゝす

中宮後より寺の
二字省きゝと
山中け温泉ゝ往ゝ

山中や葉をまきぬ温る山

赤く秋を知らんや一那谷の紅葉をわけて

石山のふりう志路一林の風

は源首良を病むより先きて勢州より

くわうく書付消人笠は露

大聖寺の城下金昌寺一翫一のひて

庭掃く出るや寺より樹

越前の境吉崎は入江舟楫より沢城の松と霧丸雲の天龍寺より

門より入る蘆鉄子葉のふりむれ

北枝 北枝 金昌寺の寺僧より 北と送るなる松雲の葉より別と送る

も北書て扇引きく別色より

葉より扇より別色よりや 北枝

み十町山より入る永年寺より福井より等載を尋ねて

名月北人お同人旅おきん

或人云信 信 教賢 赴くは那智山より 玉江を尋

阿ふむつや月尺の旅の明を照さ

月尺せよ玉江の芦沢州ぬ先

雪の寒湯の尾崎より鑑る城を過り

月より名をつみわけてやいもの秋

義仲の病覚の山より月より

春比の明神の来りて

月清——遊行のそとに砂のうへ

ゆるぎと過ぐ教養の清き月と人たもひ

名月や北國日和定らんあき

種をうまひのふきの物語は海に沈んで信を國にのきてるを
わくと龍のうまひをうまひてし揚きなりあき——とゆふひて

月いかに種を沈みし海に底

種の深といは深き遊ひて

小萩ちきすす月の小貝小盃

さひきや源をくみたる深き木

まゝりて北國の越りて人す途やて出むて九月三日大狩
あきけのうまひをうまひてし門守の通前川前に父を斜萩とてあきけ
をうまひてしけるあきけ別荘

萩の居る北國の北國の北國

北國亭

隠き家や月と雪とふ田と反

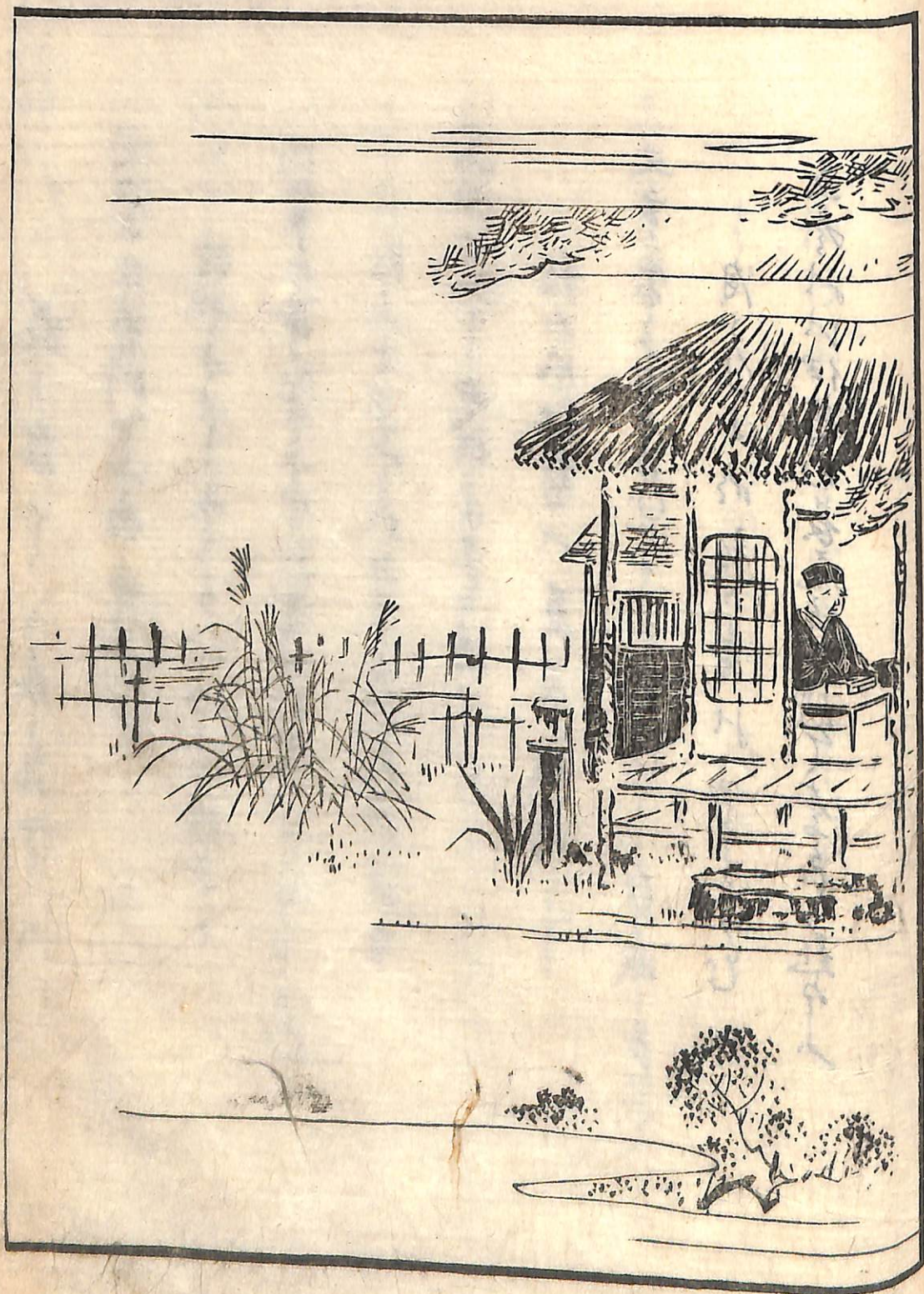
斜萩亭と遊ひ

甚うに月とたのう——伊吹山

伊勢に近きとてきんと旅立ちぬ

秋の雪行先くの雪屋の那

本園



萩の宿やうり萩の宿やうり

同六日本曾川を舟にて下る

館のやうきやうきゆきゆき

内宮の事をさうさうお宮の近宮をさうさうい

たうきやうきやうきやうき

山田とさう中村と云ふを道

秋の風伊勢に差原猶凍——

又玄家とさういふ——其妻のいふ——其感——あむて

月さひよ明智うあはれ——きむ

立寄れば伊勢の長尾味と越えてさういふ赴かへ

初時雨落も小菰をけけあり

さう雪やいら大佛に柱立

まうと落しやうとあふ途中

いふめ——ききやうこれの松笠

玄家 俗名御井 年次郎 の落柿舎のいふいふ——辨明と云物といふ大尺松笠

とて秋のさういふいふ——あつちの——あつち

長喃う横もあふく——あつちの辨明と云

猿月と云ふ落柿の赴かへ

何う法師の市にゆく鳥

元禄之庚午

行年 早七

都近きふと云と近くと相とあふ

誰人々菰美くいさひ花はま

又伊勢よりして二尺の園をわたりて

うたうさふ瀬のむも浦はま

踏学亭より遊ひ

帯衣のぬきも折んぬる花

園女 若所 西町中 徳名
一有 東後 大坂 辰 彦 氏 亭より遊

暖簾のわくもはゆー 北の梅

伊賀より花垣の庄より

一里より花垣の庄より

木白亭

島打おとわありし の梅麻

後堂喬木亭より遊

おもしろ花や木深き殿造り

又近江より越え 氏 漢四 酒落堂より遊 其代で出たひて

四方より花吹雪 乃海

木の末にけり 能くさくさかな

旅集歌ありて 情まきけり云ありて

新まき歌ありて 人ともみえり

夏四月初て 石山 奥國 山崎 幻燈 庵 鑑ひて 今 改 甚 記 せ 作 事 々

先代のむねの末より 又 木 立

一書一元孫との言を國を山と云ふと有りて里のまゝ谷川の源を採きて
一石一丁屋の法華經を言ひのひとて

おもうる人といふとあれ上林に入亭にて

菅人や樽郎 確く 覚來那

大津の奇多亭

旋花はみみの水成る屋百々

加洲秋の初 案云 といはれ居やとめこ夜飯宿のひい

我宿を故のちひとて池をうれ

蘇原まで人送りのひと

やうと花ぬきとぬき人々深のまろ

旅病や為冷とつと秋のやま

といふ句と流しといひ其店を吐流し

は年々秋のるまの言ふに北史并野水等といはれ居る多て俗語あり是外様葉集より聖年
に名づけりといふまゝ年のるまに北史に記す家とあるといふ語は國の人なりといふありと云せし
うもあれといふまゝとていふや
法云考といふ

其秋も宿のまゝ店 号と名店又 といはれと推戸の人といふ對

草は戸を志まじや穂葉も唐より

新宵を楚江亭良夜を東宿懐ふといふ

来くといふは流しといひの月乃密

と井もはつたかきやまは月

十六夜を名月の満ちて潮あり舟とて之堅固又打虫の濱とて

十六夜や海老葉の宵なり

源明寺月堂より浮御堂

既望の
残あり 又其源堅固と道達一のひて

病唐の夜きよなる旅おくれ

海士の家より小海老を交すいづれ

醫師亦既の許よりいさめをきかひふ客意八珍を煮炊とせん

城よりきく碓と吸草の能く那

大津の丹墀

俗名なる馬
能く又ち

う亭よりあひのひに骸骨ものの留致をたす

く能くするはをぬきく森臺の壁よりけなはしきふきふきのたき

かゝはあふことゆんやうに髑髏を抱きて終るまでうつとわうて

はるも只は生かんと志めきくいのありとなく一をりて

いあつてもやうなはまきすくきの種

無名唐の閑居より乙州

尾留月
のみ

う橋を携来うの時

叶は左や日暮るくくき一草の酒

李由

いふ唐の明堂の蓋
軒釈又社累年四様唐

玄成の三人の對

薬箱と梯とうれき草の唐

洛の雲行

俗名なる
は唐の

書家也自画の像を替えてはまれのひて

さうらうむけあふきく姑の著

冬来より起る大津と道

と尺の山よりあふきの本葉のれ

所盡の別當景概九の許と遊

臘月の末洛を去く大津の乙州の家より

人々を以て我々年已老

元禄四辛未 行年
八 湖底の無名庵にて暮を過し三日宵に四日と題す

有之

大津絵の尊はるゝめり何佛

乙卯年武江李之麟

梅若蓬 まうこの病のとうけ

國家之難

妻めしやうに悪の猫の妻

一書より其の白と雜波よりとそと一ふみそととむと木松より而のるを幅の白とあふ
然とも雜波よりとれよりにまき人

以年猿叢集成又渚之三日相國寺之銘之

黄子と感ある竹のそや— 弘

上
院
砌

留上小僧あふらん山々々々

嵐山

花の山一丁下 悲 窓

此以支考

号獅子眠又蓮二坊在石坊
西花坊尾お大山の寺なり

此乃推世之花子爲一也

高木川沿に架

卯月十八日吉見る落柿舎を暫く止る其真意は 小智舎を以て

うたふや竹のそとを歌人乃果

落柿舎類破とけしとある

さみ多きや色紙屋きたる壁の紅

袖のむらむらとを思ふ料理の旨

み月冒其姿を思ふ回条の川原納涼まきつる

川風や落柿を思ふ夕暮の

大津より丹桂亭を遊其家名を称しひ

ひりくんとある廟やを此岸

蓮の香の目と通すや面乃鼻

其月より仙仙亭を招う終

は病を多鶴と志ぬ麻の形

秋澄より心より号す 亭は初會を招われぬ

月代や藤より紙おく宵の霜

堅田の森際可休亭

祖父と親其子に屋や柿をかん

石山より信あり

檜樹は志のく月の名残あり

落柿の曲翠号す落柿居常居 外紀年多度居 亭を遊

乳麵の下禁ふ歌を夜をかか

冬末武蔵野人とていひ先平田一名月の亭曲り待て

たゞよめる涙や深き散るみち

百年のけしきを庭の落葉うれ

流ぬる越え垂井の宿難がうけよ金と

作りぬの庭をいそむる若くきこりぬ

又耕雪の別墅を遊ゆ

あつと白むやけし霞と花

大垣の越え川亭うき

折しと伊吹を乃々や冬籠り

斜嶺亭能登尾州の彼と熱田の梅人亭を遊

あ仙やあき澤ふけふ福里

は時名護屋の露川入門号月之河を越て新城の白雪うけよあふ

ふに掘先掘後の名を興へり

其あふむ掘り多しあ仙花

は時あ考掘済同家の家士若原権忠の宅

あふ倦るはあふしや冬籠り

風あふるあふ就しあふ

夜急ひと川新岸へ梅樹うけ

あふしと岩吹とあふるねりあふ

富田の御如舟塩本の家うき

於風松風う情を削り住居を管段と云ふ物数案を云ひあはれ月
のうそをいふとて芭蕉五のそを裁り

をいへば筆を握るのけん店のみ

芭蕉哉
橋中河有
九月浪華吐
洒堂深川子
來り能諧ある
是を深川
集といふ
支梁亭
の口切と招きて

一切の端は底を以てするべし

許六亭之遊記

々々々の人々年々色物時局

素堂序と年忌との會

昔多しと存の笑ふ如く、これ

元禄六 癸酉 行年 五十

元日 田舎のりそを忘るけき

僧雪吟う梅と出る送別の新ありて

鶴の毛は夏を衣やと那の毛

露沾公之衣

西行の唐も何々蘇むの尾

夏許六二刻字一
時
筆門辭又
送刻辭有

推し花の心も
似ふ木曾の旅

又露川へや
たふさ

五月初二日 晴 采茶人 行

秋軍関の説と作らぬ

朝うちや昼に寝おろしと門の垣

七月七日の秋西星とあつて

言ふより星も旅病や岩の上

源川の末め本松の舟とて

川とは川下や月乃友

門人松倉盛榮

板倉盛の長
八月廿五年

う誂と出ぬて

秋風乃折るやき葉の枝

初七日其墓と結ると有て

尺一やそは七日を墓の二日の月

秋順

秀甚角の父
表は 希子

う誂と出ぬて

八月廿七日を墓の二日の月

秋水亭と遊

秋結や葉は鳥のさる豆商串

八丁堀とて

葉は花さくや石屋の石の石

大門通りを過る頃

琴箱や古物店の寄戸の葉

小名木澤の相実と招かれぬて

秋は流る新しや末は小松川

十月九日素雪亭より花園の遊有

雪は雪や庭は雪なる履の履

菅沼曲の旅館を訪く

埋火や雪なる窓の影ほろし

後雪玄席より旅館を訪葉枯と嘆く

もけぬの大根うゝ新うれ

有明より十日ふ近し鉄の音

元禄七甲戌行年
五十一 源川左衛門

蓮葉より雪や伊勢の初便り

雪姫の花よりいさめをきかひて

心より雪の枝よりぬきんころり

本隠きて茶摘よりやふ如物

子冊亭より招きかひ

はる陽ちや敷と小庭の別世敷

柳隣り新宅を賞し自画賛を贈りぬ

雪のうゝぬきぬ牡丹の花の密

炭俵集別中お集滅至月十日詣り赴き結ひ源川の店

正室より雪亭より
同み元禄六

雪亭や竹は子敷より老をきく

は時京橋の乙州の家より立ち上りて訪むかひしう乙州お河りて同集滅

名残惜けよんゆる別きて東海屋を經ぬ川崎の船で送る人々對し

麦の穂をもちのふつうむ別きてうれ

晦日箱根の関を越え

目より秋時や群うみ月不こ

せうろ路や金襴も茶はふりい

大井川をさぐる富田の御舟家逗留しぬ

甚ちおのき葉ふくに茶子汁

さみしきの雪ふき落せ大井川

なれ月津浦より出て赤坂や

尾崎の石蔵屋の前より草庵を越えて二日逗留し田舎の人々對し

雪を越え代々山田は新屋

野おとま居けるを訪

源へふ指圖をんゆる住むる所

美濃より越えしん田の雪由き方一文と強てかひて

魚白のひるおせうもは麻乃山

大垣より富田氏子川より日光御代末に信守もて送る人々

信濃の雪をもちのふつうかけし人々

蔵田氏に遊し

茶つけしるは居りや田植漁

又名古屋より取てしるは居りや田植漁

隠士山田成素談る亭の飯前あり

水鶴あゝと人の心と和佐谷泊

由伊賀を越く上野丁を望み
山田成素 飯前を構えんとす

一説は自裁の心
とあり

源一とや直に野松の枝は形

漲る赴きと来る暖かいの別墅に納涼あり

東路は毛鷲をしかく麻もみ

新築よりとてきて源一の泥

聖明亭の遊

源一とを往くついで暖かいの竹

とてついで居る所の名はありと云ふ中へ

所の波もいそぎや蓬臺聖

清純の水波とせし心也

と云即時の句を録するに付たむうといふ事なれけん別墅に
控るなりとあり

小倉山常寂寺の宿

松林を月めくや空のかさむる音

六月や峰の雲おく 嵐山

清洲や浪よりり也青松葉

背と道邊の人の道
後更録 浪華人 又對して

我も心も二つり 割りとあるふ

は清き心なりとて支考ふ茶山の草堂号茶山の遊ひのむくはるる像喜名亭より

閑らう時宇治山伏見は里代経くゆつ終るは年ハいつともうの
逗留して桃源ありと愛ひのむ後には曲葉うけつてまに細源あり

夏は秋やくつきて明く冷く物
飯何やくと噪り馳きや夕きくみ

は南院回象
細源とあり

さう浪や風の薫りはね振子
湖や暑うけ惜む雪の霽

大津より東岸亭号東岸

秋ちのき心のうらや田舎半

秋無名亭より西のふ

道細く南力石村の花の露

文月の初又木亭亭より遊む

むくくと登るふくく登おくれ

喜名亭喜名亭より
の句作さうく

は以て伊賀の兄ねんの許るは消息有て旧里より遠く金谷にても

みだりふ
善光寺と名流院と云

家らこれねより髪乃る髪より

善堂云席より庭ついでと見ぬ

風をや志とるは桂く庭乃る秋

七月廿八日叢書亭 松雅 遊ひ能備有良辰を山家も遊

名月と松庵のきりや田は曇り

名月ありを柳うしとるきて 柳畑

十六夜を叢書亭に満ちぬ

今宵誰より一花月も十六里

片野の空翠亭

里ありて柳のきりや田は曇り

は須ま考伊勢は中後と傳ふ山居を宿をけるに

舊友をまじりてとてとる山路は

まじりて考惟然といふもひ大和も赴きまじり九月八日並書

木津川を系録同法にて舟をより奈良に

奈良は多や奈良良き古き佛を

奈良の香や奈良は幾代の男ふ

猿河の道は舍を求めたまひ

むかしとくへ尾をりぬ一木の鹿

宮上峰

奈良は多よりかきけりる奈良白

其より大坂と智鏡と奈良は難波のけりあけりる奈良

と下りて雨の奈良よりきて都は地よりハ食行柳は

方を見せしハ家にてとるい歩歩志川より玉露ありて

夢よ出く奈良と難波に宵月相

浪華ふのひー人とはまきやーとて教ふる席より天を
恒吉の深きと心まきとて遊のひ

は秋を何とてとる雪ー

十三日恒吉の市よりぬいーとて魚のやとる雨より吟詩
あふ夕やとる悪客を惱みのひー次は秋をて快ーとて
止亭より恒吉の月の名残をてく恒吉の市にきてけり

外書てふ別巻る月見と評

は秋を名川畔止亭
月見下送思と端書有て

月浣や孤情う秋思の性

其折亭

秋もさやーとて雨の秋

廿一日二日と又東庵亭遊

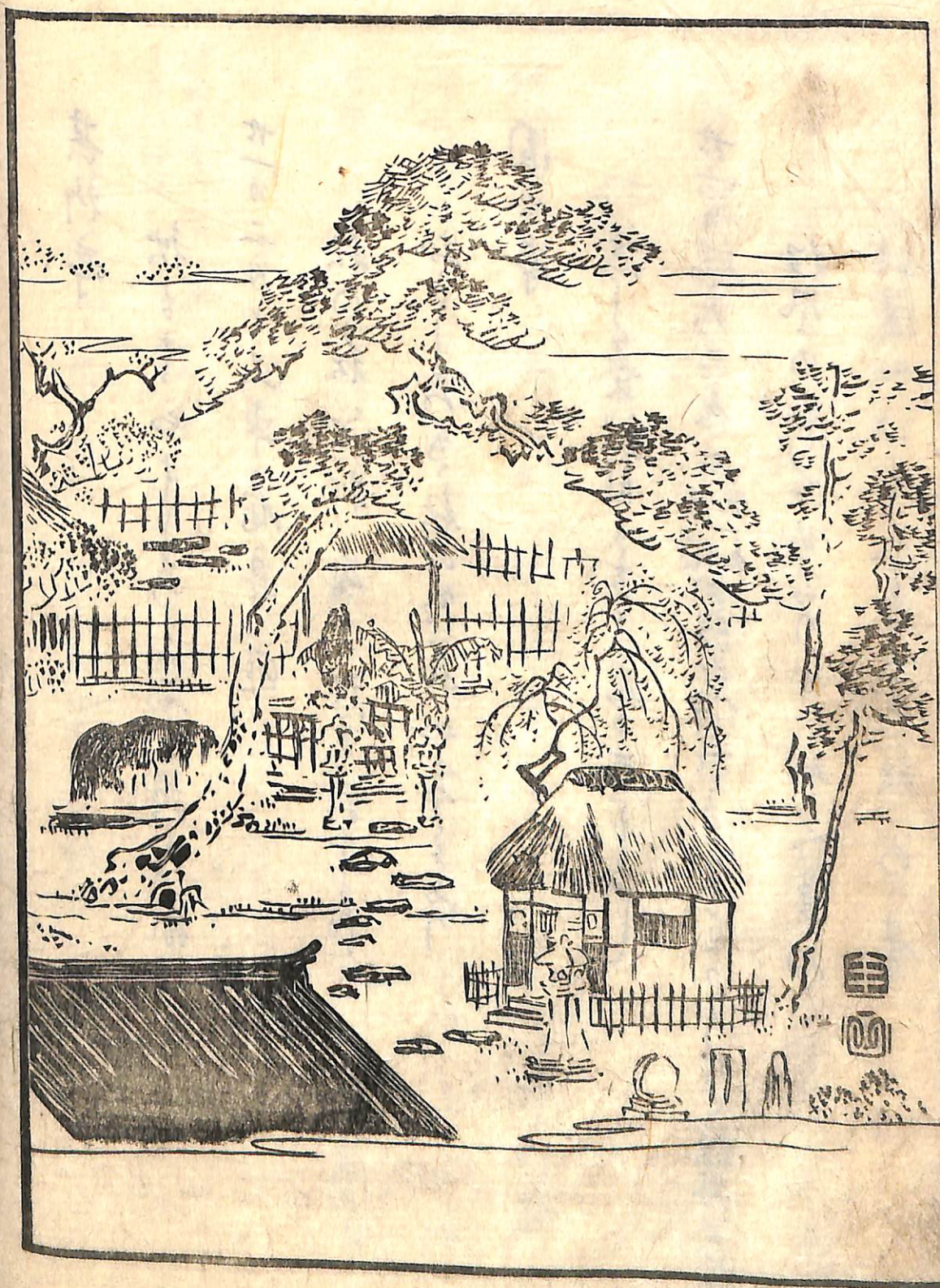
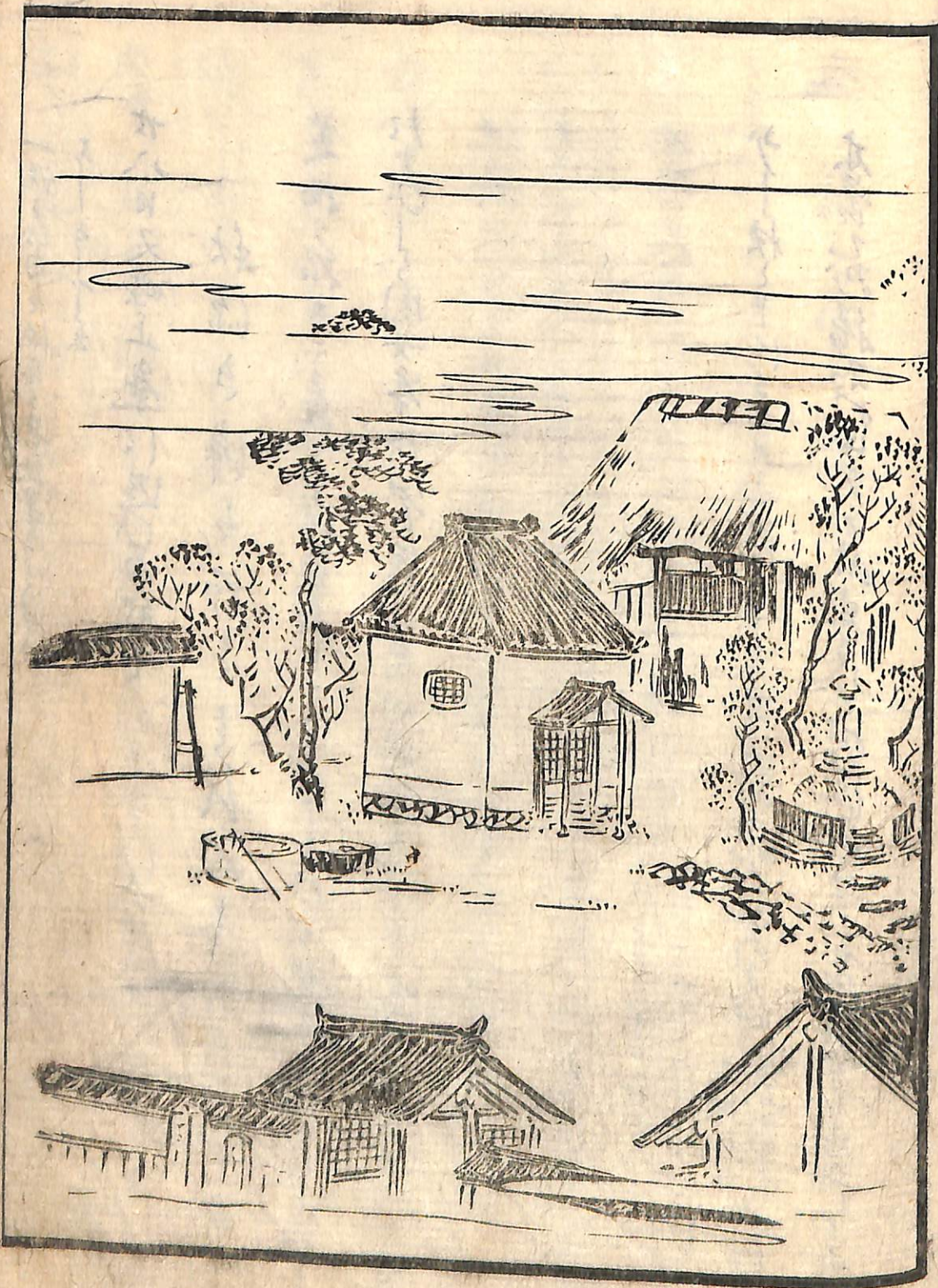
秋の秋を打崩ーたる歌ー
おもーる秋の秋を打崩ー

園女亭

あーる秋の目とてる秋の目

廿一日恒吉の市よりぬいーとて魚のやとる雨より吟詩
あふ夕やとる悪客を惱みのひー次は秋をて快ーとて

松風の軒をぬきーとて秋の目
は道やゆー人あーとて秋の目



一説は向を既足る甚便基よりして
あしやうと云

廿八日又睦止亭に遊びのむて

秋涼き隣を何をもれ人そ

芝柏う招きうゑゑ一は数句とをきしとれゑ聖を必ゆの人と約し

たやひう園女亭は金魚の園に塊積う隣ると受らきて廿九日を

池の瀬のいゝと有て海幸お花金に在る家に臥せりは病者の金魚
惟然酒堂之道

金魚 昔種 吾舟次郎金魚
尼来貞はみかあり 十月二日二日のいゝと病漸くにつのりけるより小

想てみ日とをみれつ人親友の消息あり はみとて道里遠境の
門人二十餘人よりと云 六日の以

がう快とやある七日小京より吉原江州親と云の文叶 是所の店
徳田氏氏 大津を

本島乙州橋下れは美か若ある八日秋涼更なるを記信る春丹と名をき

旅る病く多る枯等と云けり

と云向と云一あわゝ其後吉原を考とては今の可否と問ふ我

病華ありけり八日一の文達物おの沙汰あり十日の夕其南来る 其南
より時

吉原の病者より人々を伴ひてお堀一入してゆき 其夜は雨の降る小本屋を訪し

是等の大坂橋より悩む人よりて急き廻りしと也

やされけるハ吾は死も怖るる迫りねえいゆる也素より水宿を樓の

方には葉うの葉とて海よりうらうは星きともうらひ只歌へる老をけ

葉とて宛然その唇と涙のそと涼く頼る其後た右の人談

退ける不浄とありし香を短く後安卧してものいひ後を以十二日

の申は刻半と候とありて近化しひききし門人おめく涙とて是

あり其相亡骸とて櫃に入川舟より十餘人送る伏見小

せんぐー 標ふにきく ぬ又かききに

碑 ありふの銘に曰

予あて出ちハ市垣連ふのを甲斐の湯おの社
をいふとけく 三良山 枕を 西三 神のいふ
永く 風流のこち びを 後 ぬふ

重石子

今よりあてぬやうき

北の ぬれ 枯屋も



折清春い 湯も 徳也

我度や 枕も 虫の 鳴る

秋の 立 陳も 衣の ぬる

床も ふ 山も 雨の ぬる

吟と 方 江 志 暮 暮 の 白 々 哉

月 喃 亭 和 樂 稿

